

## 帝政と共和政

——1880年代のフランスにおけるジェローム派の思想と運動——

湯 浅 翔 馬

### はじめに

フランス政治史における1880年代は、1873年の王政復古の危機に代表される1870年代の権力争いに勝利を収めた共和派が、共和政の「確立」を推し進めていく時期に当たる。それは同時に、ブーランジスムを契機として、ナショナリズムという共和派に由来する新たな右翼勢力が台頭する一方で、王党派やボナパルト派ら王朝を土台とする右翼勢力は衰退していく時期でもある<sup>(1)</sup>。本稿は、王朝に基づいた旧来の右翼勢力の中でも、「権威」と「デモクラシー」の両義性を特徴とするボナパルティズムが、「議会共和政」に、どのように向かい合ったのかを、この時期に活動したジェローム派というボナパルト派左派集団の思想と運動を通じて検討することを目的とする。

さて、第三共和政期のボナパルト派研究では、同派の「保守化」が指摘されてきた。ロスニーの1870年代のボナパルト派研究やアンドレの第三共和政期のボナパルト派下院議員に関するプロソグラフィック研究では、「名望家」に立脚した党派構造や、王党派との緊密な協力関係などを通じて、政治勢力としてのボナパルト派が、「保守化」していく過程が描かれてきた<sup>(2)</sup>。こうした「保守化」は、1879年の皇太子の死によるナポレオン3世の直系の断絶にともない、共和派ナポレオン公ジェローム le prince Napoléon-Jérôme が皇位継承権を獲得したことから生じた、ボナパルト派内の分裂によって加速した。共和派として活動してきたナポレオン公の皇位継承に反感を抱いた「保守的」ボナパルティストは、ナポレオン公の長男ヴィクトル公 le prince Victor への譲位を求めるとともに、王党派とボナパルト派の緊密な連携のもとでの共和派への対抗を訴えた。このヴィクトル派 victoriens を中心として、1880年代前半からボナパルト派が「右傾化」、「保守派化」していくのである<sup>(3)</sup>。

本稿で取り上げるジェローム派 jérômistes は、ヴィクトル派とは逆に、ナポレオン公を支持したボナパルト派内の一集団である。ボナパルト派に属するという意味では、当時のフランス政治勢力の「右翼」に分類されるが、しかし、彼らの多くはボナパルト派の中でも左派に位置する。彼らは、旧来の王朝を土台とした「右翼」勢力の中でも、いち早く共和政という枠組みに同意を示し、憲法改正による共和政の改革を訴えた。改憲派 révisionnistes と呼ばれた彼らの思想と

運動も、1880年代のボナパルティズム研究において無視できないものと思われる。ナポレオン公は帝政憲法に則った正統な皇位継承者であり、ボナパルト派議員団アベル・オ・プープルは公式にそのことを認めていた。ヴィクトル派を牽制しつつ、憲法改正による共和政の「民主化」を訴えたジェローム派のプロパガンダは、多くの研究が指摘するように、ブーランジスムを先取りするような内容を有する点で注目に値する。しかし、ジェローム派に関する研究はあまり進んでおらず、その位置づけも確定していない状況にある。バテスティによるナポレオン公の伝記的研究が存在するものの<sup>(4)</sup>、派閥としてのジェローム派を中心対象とした研究は、ブダのDEA論文のみであり、それでさえDEA論文という性質のためか、自身の研究の概要を押さえるにとどまっている<sup>(5)</sup>。19世紀の「大衆のボナパルティズム」bonapartisme populaireを研究したメナジェールの研究がジェローム派を取り上げているが、運動やイデオロギーに深く立ち入っていない<sup>(6)</sup>。

そこで本稿では、ナポレオン公はもとより、ポール・ラングレ Paul Lenglé<sup>(7)</sup>、エルネスト・パスカル Ernest Pascal<sup>(8)</sup>、ギュスターヴ・クネオ・ドルナノ Gustave Cunéo d'Ornano<sup>(9)</sup>、ロベール＝ミシェル Robert-Mitchell<sup>(10)</sup>などの主要なジェローム派のメンバーたちの、ブーランジスムの高揚に至るまでの言説を検討することで、ヴィクトル派主体の「保守化」とは別の形で展開されたボナパルティズムの一側面を明らかにしたい。彼らは熱心なプロパガンダ活動を繰り返した一方で、その運動には組織化や選挙の面で多くの困難を伴った点にも注目する。80年代前半に熱心にジェローム派の論陣を張った人々の一部は運動から離脱することになるのである。史料としては、プロパガンダが展開された新聞、小冊子などの出版物を中心として、ジェローム派の私的集会や公開集会の様子などが記されたパリ警視庁文書館所蔵の報告書（APP, Sous-série BA）、フランス国立中央文書館所蔵のナポレオン公宛ての書簡（AN 400AP, Fonds Napoléon）も分析対象となる。デモクラシーの名の下に帝政を掲げ、「議会共和政」の民主化を求めた彼らの思想と運動を検討することで、左右両翼が複雑に絡みあう第三共和政初期の政治的状況の一端に光を当てたい。

## 1. 「左翼的」ボナパルティズムの系譜とジェローム派の誕生

ジェローム派の思想を検討する前に、ジェローム派の誕生に至るまでの「左翼的」ボナパルティズムの系譜を概観しておきたい。フランス近現代政治史の大家レモンは、正統王朝派、オルレアン派、ボナパルト派を近代フランスの右翼の政治文化を形作った3つの源流とした<sup>(11)</sup>。それぞれに特徴を有する3つの王朝による支配とその基底にある構造や思想をフランス右翼の歴史の起点とするこの定式は古典的とも言えるものであるが<sup>(12)</sup>、そのうちの1つであるボナパルティズムの場合、メナジェールが指摘するように、革命後のデモクラシーに基づいた体制として、その歴史は「左翼的」側面を常に併せ持ってきた。

第一帝政の崩壊後、人々がナポレオンに夢見たものは「左翼的」なものであった<sup>(13)</sup>。エルバ

島から帰還するナポレオンは、パンと仕事と公平をフランスにもたらすだろうと人々は期待したのである<sup>(14)</sup>。制限選挙王政下において、帝政は、国民的栄光や権威の原理に加えて、デモクラシーというフランス革命の遺産を保証する体制として、右翼ではなく左翼に位置づけられた<sup>(15)</sup>。しかし、1820年代から、ナポレオン伝説がフランス各地に広く伝播する一方で、1821年のナポレオン1世の死、1832年の皇太子「ナポレオン2世」の早逝により、帝政再建の夢は一時中断を余儀なくされる。

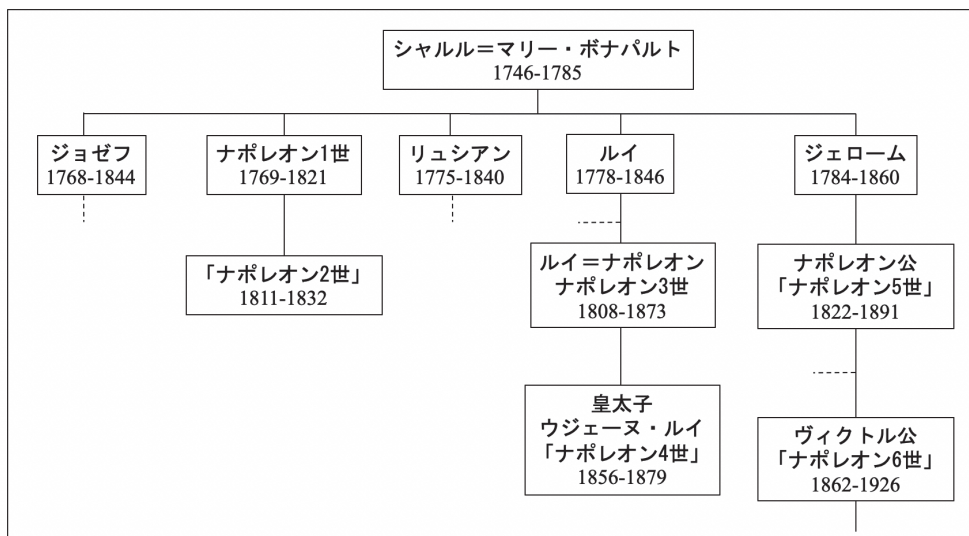
ナポレオンとフランス人民のつながりを結び直したのがルイ＝ナポレオンであった。1830年代の、『政治的夢想』*Réveries politiques* (1832年) や『ナポレオンの観念』*L'Idée napoléonienne* (1839年) などのルイ＝ナポレオンの著作には、直接民主主義を擁護するジャコバン主義の影響が認められる<sup>(16)</sup>。また『貧困の撲滅』*L'Extinction du paupérisme* (1844) ではサン＝シモン主義の影響が顕著であるように、後に皇帝となった彼は「社会主義的」側面を有してさえた<sup>(17)</sup>。大統領に選出された1848年の大統領選挙では、当時の保守勢力である秩序党の援護のもと出馬したにも関わらず、ルイ＝ナポレオンは農村部のみならず都市部でも大衆からの支持を集めた。

皇帝ナポレオン3世の帝政は、「権威帝政」といわれる1852年体制が、徐々に自由化へと向かうことを特色とするが、カンダールは、第二帝政の「左翼的」要素として、パレ＝ロワイヤル・グループと呼ばれたエリート労働者のロンドン万博への派遣や、団結法の制定によるストライキ権の確立、ヴィクトル・デュリュイの教育改革、さらに男子普通選挙制度や国民投票の実施など、同時代の他国と比較して先進的な政治制度を備えていた点をあげている<sup>(18)</sup>。

パレ＝ロワイヤル・グループの中心にいたのが、ナポレオン公ジェローム (1822～1891) である<sup>(19)</sup>。彼は、ナポレオン1世の弟、ウェストファリア王ジェローム・ボナパルトの息子であり、ナポレオン公、あるいはプロン＝プロン Plon-Plon の愛称で呼ばれた。第二共和政期には共和派勢力に協力し、ルイ＝ナポレオンのクーデタを批判した<sup>(20)</sup>。第二帝政期には皇族として体制内に収まるが、労働者の境遇改善、反教権主義、政治的自由の拡大などを主張し、帝政の自由化と民主化のために尽力した<sup>(21)</sup>。ロンドン万博への労働者代表団の派遣でも中心的な役割をナポレオン公は果たした。

第二帝政の崩壊後、ナポレオン公は、共和政の樹立の正統性を認め、共和派として活動するようになる。1876年の下院選では、ボナパルト派議員団アベル・オ・プープルの指導者ウジェーヌ・ルエルが出馬を予定していたアジャクシオでの立候補を表明し、その所信表明で第三共和政の正統性を認めたいと述べ、共和政こそがフランスに唯一可能な政体であると述べた。1877年には王党派の大統領マクマオンの下院解散とそれを支持した保守勢力（王党派とボナパルト派）に対抗する共和派連合にその名を連ねた<sup>(22)</sup>。このように共和派として活動することも厭わないナポレオン公に皇位継承権が移ることになる。

1879年6月、皇帝ナポレオン3世と皇后ウージェニーの一人息子である皇太子「ナポレオン4



【図1】ボナパルト家の簡易家系図

世」が、亡命先イギリスの志願兵として参加していたズルー戦争で死去したことにより、皇帝の直系が断絶した。1870年の国民投票によって改正が承認された帝政憲法の規定では、ナポレオン3世のいとこのナポレオン公ジェロームが継承権を獲得することになる。しかし、皇太子は従軍前にしたためていた遺言において、ナポレオン公の長男であるヴィクトル公を継承者として指名していた<sup>(23)</sup>。ウージェーヌ・ルエル Eugène Rouher によって集められた上院議員などの有力者が対応を協議した結果、帝政憲法に基づきナポレオン公を正統な継承者として認めることになった<sup>(24)</sup>。しかし、ナポレオン公の継承に反感を抱くポール・ド・カサニャック Paul de Cassagnac を中心とする保守的ボナバルティストと、ジュール・アミーグ Jules Amigues など一部のボナパルト派左派は、ヴィクトル公のもとでの帝政再建を目指す運動を開始する。その結果、1880年代のボナパルト派は、ナポレオン公を支持するジェローム派と、その長男であるヴィクトル公を支持するヴィクトル派に分裂した状態に陥った。

なお、ジェローム派のなかには、心情的にはヴィクトル公を支持するものの、国民投票によって承認された憲法の規定という正統性には抗いがたく、ナポレオン公への忠誠を放棄できなかった者も少なからずいた<sup>(25)</sup>。本稿で扱うのは、そうした「消極的ジェローム派」ではなく、一時的にでも出版物や集会などで積極的にナポレオン公への支持を表明した人々である。

## 2. ジェローム派における「帝政」と「共和政」

ナポレオン公自身がそうであったように、ジェローム派の多くは、民主派 démocrates を名乗り、基本的に王政よりも共和政を支持した<sup>(26)</sup>。彼らは1870年代にボナパルト派が展開した王党

## 帝政と共和政

派との選挙協力を批判するとともに、デモクラシーの象徴である共和政自体を否定しなかった。例えば、1881年2月の集会の演説においてパスカルは、「私たちは共和派である。大革命の息子である」と述べている。同じ集会でラングレは「ナポレオンとともにある共和政の方が、オマール公とともにある君主政よりも良いのだ」と宣言した<sup>(27)</sup>。ロベール＝ミシェルも、1881年2月の集会で、「私たちの義務は共和政を受け入れることである」とまで述べている<sup>(28)</sup>。クネオ・ドルナノも「ボナパルト派と共和派の間には、ほとんど差異はない」と断言している<sup>(29)</sup>。彼らは、共和派とボナパルト派は「革命という同じ母」を有するとして、時には「共和派」を自称することも厭わなかった<sup>(30)</sup>。それにもかかわらず、ジェローム派は当時の共和政とそれを率いていた共和派を批判し、ボナパルティストとして活動した。それはなぜだろうか。

それには、彼らの認識における「帝政」と「共和政」と「デモクラシー」の関係が深く関わっている。まず、ナポレオン公のもとに集まったボナパルト派左派にとって、「ナポレオン」は、単に国民投票によって承認された君主というよりも、国民・人民の代表として位置づけられる。前述のパスカルの「私たちは共和派である。大革命の息子である」という発言は以下のように続く。「ただ、私たちボナパルティストは、共和国の大統領であるボナパルトを否定しない。事実、私たちは民主派であり、ナポレオンたちに従う。なぜなら、彼らこそが、1795年から1815年にかけて、1848年から1870年にかけて、国民の意志に真に従ってきたからである」<sup>(31)</sup>。ジェローム派において、「ナポレオン」は革命の擁護者、人民の権利の守護者として位置づけられ<sup>(32)</sup>、ブルボン王政やオルレアン王政とは明確に区別される<sup>(33)</sup>。

ナポレオンを人民の利害の擁護者とするジェローム派の認識において、帝政はフランス革命後のデモクラシーの歴史と深く結び付けられた<sup>(34)</sup>。ラングレはある集会で以下のようにナポレオンの歴史を要約している。フランス革命後の約100年間、「誠実かつ実践的な民主派」だったのはナポレオンたちのみであった。ナポレオン1世の言行には、人民主権、自由、平等、国家の安全、所有権を保障するという意志に満ち満ちており、それらは、国民投票の実施、ナポレオン法典、コンコルダートなどの大事業で象徴的に実践された。3度の国民投票によって喝采を浴びたナポレオン3世もまた、人民の幸福のみを目的に統治を行った国民の代表であった。そして、1815年と1870年の二人のナポレオンの失墜は、デモクラシーの失墜であったと言う<sup>(35)</sup>。

「フランスは民主的な国家なのか？私にとっては、疑う余地もない。私は自分の国に満足している。私は自分が身を捧げている原理を誇りに思っている。なぜなら、平等を目指す心が私たちに根付いており、民主的観念が私たちに浸透しているとすれば、それはナポレオンたちの政治のおかげであるという信念を持っているからである！」<sup>(36)</sup>

このように国民 nation・人民 people と強固に結び付けられたデモクラシーの伝統こそが「ナ



ポレオンの伝統」であるという主張がジェローム派の帝政観の特徴であり、この系譜に現在の皇位継承者であるナポレオン公も位置づけられた<sup>(37)</sup>。他方で、カサニャックを中心とするヴィクトル派が推し進めた、王党派とボナパルト派の保守派同盟は「私たちの伝統」ではないとラングレは批判している<sup>(38)</sup>。

こうしたデモクラシー観を有するジェローム派のプロパガンダは、後述するようにオポルチュニスト体制をブルジョワの寡頭政として批判するものであり、それに対置するかたちで、「人民」に呼びかけるものであった。ラングレは、ジェローム派の日刊紙『プーブル』*Le Peuple* 創刊号で、人民とは生まれや富とは無関係に同じ権利と義務を有する市民の総体 *l'ensemble des citoyens* と規定したうえで、以下のように宣言している。

「私たちは人民 *Peuple* がその主権の行使を回復することを望んでいる。なぜなら、私たちは未来を救いたいからであり、全ての進歩、全ての幸福、全ての秩序、全ての権威は人民主権にあると深く信じているからである。[…]

私たちは、全ての人民の権利を何としてでも擁護したい。なぜなら、私たちは信念を持ったボナパルト派であり、ナポレオンの勝利とは、人民の至上の栄光だからである」<sup>(39)</sup>。

急進派の牙城であった労働者街ベルヴィルでの集会で、ロベール＝ミシェルは、「私たちボナパルト派はかくも民主的な地区の中心で集会を開くことを恐れはしない。[…] 私たちの党派は真に民主的な党派である」と宣言し、ベルヴィルに住まう住民を「知的で熱烈な人々」と表現している<sup>(40)</sup>。クネオ・ドルナノもある集会で「人民という偉大なる労働者の協力なしに、議員たちが憲法に関して何かを行なったとしても、それは議員間の一時的な連立という漂砂の上に打ち立てられ、結局脆弱で意味のないものとなるだろう」と述べ、これに反論する者は人民の敵となると宣言している<sup>(41)</sup>。このようにジェローム派において人民・国民の声は神聖視された。人民の利害はナポレオンの利害と同一のものとされ<sup>(42)</sup>、人民の意志に従うことがあるべき統治の形とされた。

他方で、オルレアン派と穏健共和派の「妥協」によって成立した「第三共和憲法」は、人民主権の敵対者によって作られたものとされ<sup>(43)</sup>、したがってこれに基づく「議会共和政」は、「デモクラシーを蔑ろにしている」として批判の対象となった<sup>(44)</sup>。ラングレは、成立以来、予算は増大し、税が国民に重くのしかかる一方で、左右の分断が深まるばかりの第三共和政下では、公の安寧が常に脅かされていると非難している。しかし、こうした状況の原因は、共和政というレジーム自体ではなく、共和政を統治している人々と共和政の内容にあるとラングレは言う<sup>(45)</sup>。1870年代前半に政権を担ったティエール、デュフォール、ジュール・シモンはブルジョワの寡頭政たる議会主義の代表であり、彼らに続いた王党派のブッフフェヤブロイ公は教権主義的な反動

家であった。またラングレはガンベッタの才能は評価しつつも、彼はデモクラシーの否定であるオポルチュニズムの創始者であると批判する<sup>(46)</sup>。これらの共和政を統治してきた人々はナポレオンたちのような人民の利害に対する直観 intuition を欠いているのだとラングレは断言する<sup>(47)</sup>。また、クネオ・ドルナノは、度重なる内閣の変更に象徴される不安定な議会共和政下では、必要な改革が行われないうちに、労働者はパンも仕事もなく貧困にあえいでいると議会主義を攻撃している<sup>(48)</sup>。

こうした議会主義体制が引き起こす問題の解決策が、ナポレオンの統治の導入による共和政の「民主的」改革であり<sup>(49)</sup>、その中でも、ジェローム派の政策の中心となったのは人民・国民に大統領を任命する権利を与えることを中心とする憲法改正であった<sup>(50)</sup>。例えば、パスカル、ラングレ、モーリス・リシャール Maurice Richard が主宰した1884年2月の集会では、「あらゆる合法的手段による1875年憲法の改正と憲法制定議会の設置、国家の指導者を任命する権利の人民への返却」を要求することが決議されている<sup>(51)</sup>。この点に、ジェローム派が改憲派と呼ばれる所がある。「私たち、改憲派は、人民によって選ばれ、人民に責任を持つ指導者を求める。それがデモクラシーを保持する唯一の方法であり、真の代議制である」と、ある集会で述べるパスカルは<sup>(52)</sup>、別の集会で以下のように宣言している。

「私たちの基本原理は、人民に対する行政府の指導者の責任である。つまり、人民主権が集中する、この仲裁役と調整役を担う権力の創設における人民の介入である。帝政、統領政府、共和政は、国民主権から派生する種々の形態であったが、それらは、この権力の移譲によってしか、我が国のようなデモクラシーをうまく運営することはできなかった。この委任のみが、諸党派の上に立ち、他者の自由の尊重という規律の精神を社会体 corps social において維持しうるのである」<sup>(53)</sup>。

ヴィクトル派が人民による帝政、王政、共和政の選択を含む人民投票の実施を要求したのに対し、ジェローム派のプログラムは主として人民による大統領の選出へと収斂され、人民投票の実施はそのプログラムの中では後景に退いている<sup>(54)</sup>。デモクラシーを象徴するもう一つの党派である共和派の優位が磐石であるうちは、帝政再建は必ずしも目指すべきものではなかった<sup>(55)</sup>。クネオ・ドルナノやモーリス・リシャールが、デモクラシーの原理に誠実だった体制として、ナポレオン期の第一共和政の憲法の前に、国民公会期の1793年憲法や共和歴3年憲法をあげているように<sup>(56)</sup>、ジェローム派が志向したナポレオンのデモクラシーは共和政そのものを否定するものではなかった。また、ジャコバンの特徴を有しているとも言えるジェローム派の主張は、改憲による民主化を要求するという点で、保守的ボナパルティストよりも急進共和派に近く<sup>(57)</sup>、次節で述べるように選挙戦ではたびたび急進派への投票を呼びかけている。

ナポレオン公の元に集まったボナパルト左派にとって、ナポレオンの統治は必ずしも共和政自体を否定するものではない。この点にジェローム派とヴィクトル派左派との差異が顕著に現れる。反ナポレオン公を掲げたヴィクトル派左派を代表する人物であるジュール・アミーグのプロパガンダには、ジェローム派との共通項が多く見受けられる。アミーグは、普通選挙と人民投票に立脚したデモクラシーの政体として帝政を認識し、帝政は共和政の一形態であると主張した。彼は第二帝政後半の皇帝のイニシアティブによる労働者の境遇改善を称揚し、主に労働者の視点から帝政再建を訴えた<sup>(58)</sup>。しかし、1870年代に帝政再建運動を展開する中で、アミーグにおいては、労働者に利する政策の実現は帝政再建を前提とするものとなった点に、ジェローム派の「左翼的」ボナパルティズムとの断絶があったと言える。

### 3. ジェローム派の運動

ジェローム派は出版物をつうじた熱心なプロパガンダを行ったが、その運動は多くの困難を伴うものだった。日刊紙などの定期刊行物が主要なプロパガンダの装置であったが、ジェローム派新聞の多くが短命に終わった。パリにおいて、ジェローム派の論陣を張った新聞には、『ロルドル』*L'Ordre* (1879-1882)、『パリ = キャピタル』*Paris-Capitale* (1879-1881)、『ナポレオン』*Le Napoléon* (1880-1882)、『コンバ』*Le Combat* (1882-1890)、『プーブル・フランセ』*Le Peuple français* (1879-1882)、『ラベル・オ・プーブル』*L'Appel au peuple* (1883)、『プーブル』*Le Peuple* (1884-1885) などがあるが、いずれも発行部数が伸び悩み、資金難に悩まされた。長くても数年、短いと数週間で、あるものは廃刊になり、他の党派に買収され、またあるものは日刊紙から週刊紙への変更を余儀なくされた<sup>(59)</sup>。

また、運動の組織化の面でもジェローム派は困難に直面した。例えば、ラングレは1881年9月ジャン＝ジャック・ルソー通りで恒常的に活動を行うコミテを結成しようと試みたが、参加者が十分集まらなかったため、これを断念している<sup>(60)</sup>。一方で、1882年秋頃からヴィクトル派の運動は盛り上がりを見せた。パリの各区にヴィクトル派のコミテが設置され、運動の組織化が進展した<sup>(61)</sup>。こうした動きに対し、ボナパルト派内の主導権の掌握を目指して、1883年1月にナポレオン公が宣言文を発した。それまで、好機を待つという姿勢が強かったナポレオン公が発表したこの宣言文には、ジェローム派の主張が端的に表されている。

「フランスは苦しんでいる。[…]

行政府は弱体化し、何もできない。無力である。

議会は行き先もわからず、意欲もない。

権力の座にある党派はその低劣な情熱を満足させることしか追い求めていないため、彼ら自身の原理を蔑ろにしているのだ。[…]



災いは800人の上院議員と下院議員の裁量に国を委ねた憲法にある。[…]

ナポレオンたちは直接的人民主権を擁護してきた。この原理は人民投票をただただ恐れる共和派たちによって見捨てられてきた。[…] 私は1つの党派ではなく、1つの立場と1つの原理を代表するのだ。[…] その原理とは人民が指導者を任命する権利である。この権利を否定することは、国民主権に対する侵害である」<sup>(62)</sup>。

この文章が記されたポスターはパリのみならず、フランス各地の街頭に掲げられ、ナポレオン公が一時警察に逮捕される事態にまで発展した<sup>(63)</sup>。この宣言文により、ナポレオン公はその目的をある程度まで達成した。カサニャックのような反ナポレオン公のヴィクトル派を除き、多くのボナパルティストはナポレオン公の宣言文に好意的な態度を示した。これを好機と見たクネオ・ドルナノは新たに日刊紙『ラベル・オ・プープル』を創刊し、運動の活性化を図っている<sup>(64)</sup>。さらにこの宣言文は、ヴィクトル派にも影響を及ぼした。パリ1区のヴィクトル派コミテの委員長ドゥヴィル Deville はナポレオン公への支持を訴えるようになった<sup>(65)</sup>。このドゥヴィルは、1883年5月末からパリの各区にジェローム派のコミテを形成する役割を担うことになる<sup>(66)</sup>。しかし、同年12月にこの動きは頓挫してしまい<sup>(67)</sup>、ジェローム派のコミテがヴィクトル派のそのようにパリの各区に設置されることはなかった<sup>(68)</sup>。資金の不足と組織の不在のためか、前節で紹介したように、ジェローム派の運動において目を引くのは不定期に開催される集会 *réunion* や講演会 *conférence* であった<sup>(69)</sup>。また1884年春、それまで父ナポレオン公と同居していたヴィクトル公が秘密裏に家を出た。ジェローム派は親子間の関係改善に努めたが、ナポレオン公はこれに激昂し、亀裂は修まらなかった。ヴィクトル公の独立は、彼を支持する運動への積極的な参加と捉えられ、「父と息子の政治思想に大きな違いはない」としてきたジェローム派には大きな打撃となった<sup>(70)</sup>。

最後に、選挙運動における困難があった。ヴィクトル派が王党派という選挙戦における強力な同盟相手を有した一方で、ジェローム派にそうした相手はいなかった<sup>(71)</sup>。警視庁文書館所蔵の報告書には、1881年の下院選挙において、ジェローム派と急進共和派が協力する可能性が指摘されている<sup>(72)</sup>。また、1884年の市議会選挙における方針を協議する私的集会でも、ラングレやパルカルたちは、憲法改正と憲法制定議会の設置という共通の目的を有することを理由として、王党派やオポルチュニスト、保守派ではなく、急進共和派に投票するように呼びかけている<sup>(73)</sup>。しかし、それは選挙区にボナパルト派がない場合や、第二回投票にボナパルト派候補が残らなかった場合のことにすぎず、史料からは、それ以上踏み込んだ歩み寄りがあったかどうかはわからない。そのため、選挙協力と呼べるようなものはなく、あくまでそうした方針が存在したという程度だったと言える。ジェローム派の一部と急進派の密な連携が展開されるにはブーランジスムの高揚を待たなければならない<sup>(74)</sup>。

このように多くの困難を抱えたジェローム派は国政選挙での後退を余儀なくされた。1881年の下院選において、ボナパルト派の獲得議席数は45議席と77年に比べて半減し、ジェローム派にいたっては、当選できたのはクネオ・ドルナノ、エルネスト・ドレオール Ernest Dréolle、アルフォンス・アントジャン Alphonse Heantjens の3名のみであった<sup>(75)</sup>。落選したラングレは、自身の敗北の原因について、ナポレオン公に書簡を送って説明している。その中で、彼は、「田舎の有権者の性格を勘違いをしていた」とし、「彼らは町の小ブルジョワに従うのを拒むと考えていた」と述べている。また教権主義者、正統王朝派、「年離れたボナパルティスト」が、棄権や敵対候補者に投票するなどして、自身の当選を阻んだのだと説明している<sup>(76)</sup>。単独で選挙戦を展開し、当選を果たせるほどの資金も影響力もほとんどのジェローム派にはなかった<sup>(77)</sup>。

こうした選挙をめぐる問題は、保守派同盟のもとでの王党派とボナパルト派の密な選挙協力により保守派が議席数を大きく伸ばすことになる1885年の下院選でも顕著に現れた。1884年11月、クネオ・ドルナノは、王党派が国民主権の原理を受け入れるという条件のもと、カサニャックらが展開した保守派同盟による選挙戦を支持した<sup>(78)</sup>。ラングレやパスカルからの激しい批判を受けたが<sup>(79)</sup>、結局、クネオ・ドルナノは1885年の下院選で保守派同盟のリストに名を連ね、当選を果たした<sup>(80)</sup>。ジェローム派の置かれた状況から自身の当選を危ぶんだ彼は、「国民投票の候補者はいかなる相手とも選挙に関する同盟関係を結んではならないと主張することは、彼らに失敗を強いるということだ」と主張している。しかし、「篡奪者」たるオポルチュニストとの協力は不可能であり、また急進派との同盟をこちらが望んでも、彼らがそれに応えることはないために不可能であると述べている。したがって、彼の理屈からすると同盟相手は王党派しかないことになる。

「あらゆるニュアンスの保守派が、人民が彼らの運命の主人に再びなることを受け入れ、そう主張するように導こうではないか。[…]

もし、王党派の候補者が『国王万歳』と叫びながら、出馬するならば、それを押し返そうではないか」<sup>(81)</sup>。

保守派同盟によるボナパルト派と王党派の選挙協力により、1885年の下院選で保守派の獲得議席は201議席に達した。クネオ・ドルナノは、保守派の「勝利」を祝福し、ナポレオン公やラングレ、パルカルが説いた棄権を「敵前逃亡」として批判している<sup>(82)</sup>。彼は、人民主権の擁護と直接民主政の再導入という要点は押さえつつも、人民投票の原理の再興を求め、ヴィクトル派に合流した<sup>(83)</sup>。ロベール＝ミシェルもまた、ジェローム派から離脱する。1886年10月、彼は日刊紙『スヴレヌテ』 *La Souveraineté* を創刊し、ヴィクトル公への支持を大々的に表明している<sup>(84)</sup>。ロベール＝ミシェルとクネオ・ドルナノは、カサニャックらが展開した王政復古の容認を含んだ

## 帝政と共和政

保守派同盟路線を批判しながら、人民投票の原理の再興を掲げ、ヴィクトル派内における影響力の拡大を図っていくことになる<sup>(85)</sup>。

### おわりに

第1節で確認したように、ボナパルティズムの歴史は、フランス革命後のデモクラシーに基づいた体制として、「左翼的」な側面を有してきた。ジェローム派の思想と運動は、こうしたボナパルティズムの「左翼的」側面の最後の発露とも言える。ナポレオンとフランスにおけるデモクラシーの歴史を深く結び付けた彼らにとって、ボナパルティストこそが真の民主派だった。それと同時に、彼らにとって、ナポレオンの統治は共和政自体を否定するものではなかった。彼らは「ボナパルティスト」として、憲法改正を通じた人民による大統領の任命を中心とした、人民と政府が乖離した「議会共和政」の「民主化」を求めたのである。

しかし、彼らの運動には多くの困難が待ち受けていた。ヴィクトル派にも資金の問題はつきまとったが、彼らは皇后の資産や保守派同盟からの補助金に頼ることができたのに対し、ジェローム派にはナポレオン公からの補助金しかなく、恒常的な資金難に喘いだ。組織化もままならないジェローム派には、選挙戦において、ヴィクトル派における王党派のような手を組むべき相手もおらず、ジェローム派の運動から離脱する者も現れた。ロベール＝ミシェルとクネオ・ドルナノは、1880年代後半には、ヴィクトル派内の非妥協派 *intransigeants* として、運動を展開していく。こうした衰退の中<sup>(86)</sup>、1886年、共和派議員はこれまでフランスを統治した家系の一族の国外追放令を採決し、ナポレオン公はベルギーへの亡命を余儀なくされてしまう<sup>(87)</sup>。ジェローム派に象徴されるこの時期の「左翼的」ボナパルティズムの衰退は顕著であると言える。では、彼らの思想と運動はどのように位置づけられるだろうか。

1870年代の諸党派の勢力争いは、主として政体をめぐるものであったと言える。王党派は王政復古を目指し、共和派は共和政の確立を図った。無論、ボナパルティストの運動も帝政再建を求めるものであった。しかし、1879年以降、大統領、上院、下院の実権を握った共和派の時代へと移り変わっていく。こうして浮上したのが、あくまで帝政再建を目指すべきなのか、あるいは、革命という同じ起源を有するデモクラシーの政体として共和政を認めるべきなのか、という問題である。ヴィクトル派は（少なくともその初期において）前者を選び、ジェローム派は後者を選んだと言える。では、どのような共和政なら認められるのか。帝政再建を掲げながらも王党派との同盟を推し進めるヴィクトル派と「議会共和政」を批判しつつ<sup>(88)</sup>、憲法改正を通じた「ナポレオンのもの」の共和政への導入を目指して、ジェローム派は「ボナパルティスト」として活動したのである。ブーランジスムの失敗後、カトリック教徒に共和政への同意（ラリマン）を促したレオ13世の回勅以降、王党派を中心とする旧来の「右翼」が共和政という枠組みを受け入れていくという現象が起こるが、共和政それ自体を問題とするのではなく、共和政の内容を問うと

いうジェローム派の姿勢は、こうした現象の端緒に位置づけられるのではないだろうか。（「ラリマン」運動と同じ時期にボナパルト派の多くも共和政に同意するが、その理由は必ずしも宗教的な判断に基づくものではなかった）。無論、こうした点は、カトリックを取り巻く問題を含め、旧来の「右翼」に対するブーランジスムとナショナリズムの影響の検討を必要とするものである。

愛国者同盟に参加し、デルレードに影響を与えたジェローム派ジョルジュ・ティエボー Georges Thiébaud の思想は、パスカルによって創り上られたものだったとジョリーは指摘している<sup>(89)</sup>。ラングレなどのジェローム派にとどまったものだけでなく、ヴィクトル派へと向かったクネオ・ドルナノやロベール＝ミシェルも含むボナパルト派左派のメンバーたちは、「議会共和政」の転覆を求めて、ブーランジスムの高揚に身を委ねることになる。党派の分裂が複雑に入り組むボナパルト派の、ブーランジェ事件における運動の実態はどのようなものだったのだろうか。ジェローム派だけでなく、ヴィクトル派を含め、ボナパルト派はブーランジェ運動にどのように参加し、その中で何を求め、どのような影響を与え、また受けたのだろうか。当該時期のボナパルティズムの位置づけを含め、こうした点は今後の課題としたい。

#### 注

- (1) René Rémond, *Les droites en France*, Paris, Aubier, 1982, pp.146-147.
- (2) John Rothney, *Bonapartism after Sedan*, New York, Cornell University Press, 1969; Patrick André, *Les parlementaires bonapartistes de la Troisième République (1871-1940)*, thèse de doctorat (Université Paris IV), 1995.
- (3) なお、ヴィクトル派の指導者の一人であるジュール・アミーグはボナパルト派左派の人物である。しかし、同派内の左派勢力は少数にとどまった。また宗教問題などにおいて、ヴィクトル派は成立当初から「保守的」傾向を有しており、さらに1883年のアミーグの死以降、同派の「保守派化」は顕著になっていく。そのため、当該時期の「左翼的」ボナパルティズムは主としてジェローム派が体现するものだったと考えられる。拙稿「一八八〇年代前半のフランスにおけるボナパルト派の思想と運動—ヴィクトル派の形成と展開—」『史観』第178号、2018年、62-86頁。
- (4) Michèle Battesti, *Plon-Plon. Le Bonaparte rouge*, Paris, Perrin, 2010.
- (5) Jean-Michel Bedat, *Le prince Napoléon. Le jérômisme et les jérômistes*, mémoire de D.E.A. (Université de Paris X), 1990.
- (6) Bernard Ménager, *Les Napoléon du peuple*, Paris, Aubier, 1988, pp.311-354.
- (7) 1836年、ノール県生まれ。第二帝政期に副知事 sous-préfet を務める。1876から1881年までオート＝ガロンヌ県選出の下院議員を務めた。Bertrand Joly, *Dictionnaire biographique et géographique du nationalisme français, 1880-1900*, Paris, Honoré Champion, 1998, pp.238-239.
- (8) 1828年、オード県生まれ。自由主義王党派の家庭に生まれ、トゥールーズで弁護士業を営んだ。もともとはティエールと近く、第三共和政初頭には彼の政府の副書記に任命された。辞職後、ジロンド県知事（1873～1876）を務めたが、次第にボナパルト派へと接近。1879年からボナパルト派日刊紙『ロルドル』*L'Ordre* の主幹になった。出版物や集会で熱心にプロパガンダを展開した。*Ibid.*, p.312.
- (9) 1845年、ローマ生まれ。1876年から1906年までシャラント県選出の下院議員。オルドル・モラル期にはプロイ公を支持するなど保守的立場だったが、1880年代以降はナポレオンのデモクラシーを支持した。シャ

## 帝政と共和政

- ラントで日刊紙の主幹を長く務める。 *Ibid.*, p.116.
- (10) 1839年、バス＝ピレネー生まれ。1876～77年、1877～81年、1889～1893年ジロンド県選出の下院議員。1880年代初頭、熱心なジェローム派として活動した。 *Ibid.*, pp.288-289. しかし、1880年代後半にはヴィクトル派として、頭角を現し、非妥協派 *intransigeants* としてカサニャックの王党派との同盟路線を批判した。プーランジェの台頭以前から反独的なプロパガンダを展開し、プーランジェへの接近も他の保守的ヴィクトル派と比べて早かったことが特徴的である。
  - (11) R. Rémond, *op.cit.*
  - (12) Gilles Richard, *Histoire des droites en France, de 1815 à nos jours*, Paris, Perrin, 2017, pp.15-28.
  - (13) B. Ménager, *op.cit.*, pp.15-83.
  - (14) Gilles Candar, « La mémoire d'un bonapartisme de gauche » in Jean-Jacques Becker et Gilles Candar (dir.), *Histoire des gauches en France*, t.1, Paris, La Découverte, 2004, pp.152-159.
  - (15) *Ibid.*
  - (16) Julien Boudon, « Louis-Napoléon Bonaparte. Du « jacobinisme » au « socialisme » ? », in Frédérique Bluche (dir.), *Le prince, le peuple et le droit. Autour des plébiscites de 1851 et 1852*, Paris, PUF, 2000, p.199-206. また野村啓介はルイ＝ナポレオンの在野期の著作を網羅的に検討した上で、彼の皇帝民主制構想は当時としては「左翼的」思想だったと指摘している。野村啓介『フランス第二帝制の構造』九州大学出版会、2002年、33-47頁。
  - (17) ルイ＝ナポレオンとサン＝シモン主義を理解するうえでサーニユの著作が有益である。Jean Sagne, *Les racines du socialisme de Louis-Napoléon Bonaparte*, Toulouse, Privat, 2008.
  - (18) G. Candar, *op.cit.*, pp.154-158.
  - (19) 木下賢一『第二帝政とパリ民衆の世界』山川出版社、2000年、12-30頁。
  - (20) J-M. Bedat, *op.cit.*, p.11-14.
  - (21) *Ibid.*, p.26.
  - (22) M. Battesti, *op.cit.*, pp.523-528.
  - (23) Cité par *Le Pays*, 2 juillet 1879.
  - (24) *L'Ordre*, 21 juin, 3 et 21 juillet 1879; Frédéric Chalaron, « Rouher et la succession du prince impérial », in Louis Girard (dir.), *Eugène Rouher. Actes des journées d'études de Riom et Clermont-Ferrand des 16 et 17 mars 1987*, Clermont Ferrand, Publications de l'Institut d'études du Massif central, 1984, pp.89-95; Robert Schnerb, *Rouher et le Second Empire*, Paris, Armand Colin, 1949, pp.317-318.
  - (25) J. Rothney, *op.cit.*, pp.274-275.
  - (26) ナポレオン公は、1880年初頭の共和派政府による無認可修道会解散の政策を「迫害ではない」と支持したうえで、フランス革命に対する敵である正統王朝派と、国民の旗に忠実なボナバルト派の間にはいかなる共通点もないと主張している。 *L'Ordre*, 6 avril 1880.
  - (27) APP, BA1152, 27 février 1881. なおオマール公アンリ・ドルレアンはフランス王ルイ＝フィリップの5男で、政治的発言を積極的におこなった人物である。
  - (28) APP, BA90, 21 février 1881.
  - (29) APP, BA907, 20 mars 1881.
  - (30) E. Pascal, « Banquet de la révision », *Discours politiques 1878-1889*, p.217; G. Cunéo d'Ornano, « Bonapartistes et républicains », *Paris-Capitale*, 12 décembre 1879.
  - (31) APP, BA1152, 27 février 1881.
  - (32) E. Pascal, « Le parti, la cause et le prince Napoléon », *Discours politiques 1878-1889*, Paris, 1889, p.167.
  - (33) E. Pascal, « Les Napoléons », *Discours politiques 1878-1889*, pp.107-110.
  - (34) Charles Gaumont, « La Révolution et l'Empire », *Le Peuple français*, 20 octobre 1879.



- (35) P. Lenglé, *La politique des Napoléon. Discours prononcé par M. Lenglé, le novembre 1880, dans la salle du Château des Fleurs à Toulouse*, Toulouse, 1880.
- (36) *Ibid.*, p.26.
- (37) G. Cunéo d'Ornano, *Le prince Napoléon et ses doctrines. Discours prononcé à Bassac, le 24 juillet 1879, par M. Gustave Cuneo d'Ornano*, Paris, 1879. また、ナポレオン公は、オリヴィエ、ラングレ、クネオ・ドルナノとの会話の中で、第二帝政期に自由化に反対し、現在自身に反旗をひるがえすボナパルト派右派を「年老いた残存者」とし、彼らはナポレオンの伝統を何も理解していないと批判している。APP, BA89, 15 mai 1880.
- (38) P. Lenglé, « Notre politique, 1800-1852 », *Le Peuple*, 10 juin 1884.
- (39) P. Lenglé, « Le Peuple », *Le Peuple*, 18 mai 1884.
- (40) この集會に集まった参加者600人のうち、ほとんどは小売業者あるいは工場に勤務する労働者であった。APP, BA89, 25 mars 1880.
- (41) G. Cunéo d'Ornano, *La Politique des principes. Discours prononcé à Segonzac, le 12 février 1882, par M. Gustave Cuneo d'Ornano*, Angoulême, 1882, pp.22-26.
- (42) P. Lenglé, « Napoléon! », *Le Peuple*, 1er juin 1884.
- (43) P. Lenglé, *Révision et Napoléon ! Proposition de loi déposée à la Chambre des Députés et discours prononcés aux banquets du Palais-Royal et de Saint-Mandé, par M. Lenglé*, Paris, 1881, p.5.
- (44) APP, BA89, 28 juin 1880.
- (45) P. Lenglé, *La politique des Napoléon., op.cit.*, pp.7-13.
- (46) *Ibid.*, p.6.
- (47) *Ibid.*, p.25.
- (48) G. Cunéo d'Ornano, « Ouvriers sans pains », *L'Appel au peuple*, 10 mars 1883. 同じ号で、アルベール・ルナール Albert Renard は「議會主義体制は、改革を実行し、大衆に信頼を与えるために組織されるのではなく、あらゆる進歩を不可能にし、国を混乱に陥れることしかできない」と「議會共和政」を批判している。A. Renard, « Chômage », *ibid.*
- (49) 国民によって選ばれる指導者、あるいは国民投票こそがフランス革命によってもたらされた近代的な原理としたクネオ・ドルナノは、不安定な議會共和政の無能力に対する解決策として、直接民主政の導入を訴え、それをフランス革命の諸原理への回帰と捉えている。G. Cunéo d'Ornano, *La Politique des principes., op.cit.*, p.14.
- (50) 1881年1月24日にラングレが国民議會に提出した改憲案の主要な項目は、人民が指導者（大統領）を任命すること、大統領の下院解散権の否定、行政権と立法権の分離、直接選挙によって選ばれる元老院、改憲後の人民投票による承認などである。P. Lenglé, *Révision et Napoléon., op.cit.*
- (51) APP, BA91, 17 février 1884.
- (52) APP, BA62, 23 décembre 1883.
- (53) E. Pascal, « Le parti, la cause et le prince Napoléon », *op.cit.*, p.171.
- (54) クネオ・ドルナノは、ナポレオン公のもとに集まったボナパルト派は、人民投票を求めるが、共和派がそれに同意するはずもないだろうから、人民の声を体制に取り入れるために直ちに求めるべきは「人民による共和国の大統領の選出である」としている。G. Cunéo d'Ornano, « La première étape », *Paris-Capitale*, 1er mai 1881. 研究者のジャン＝ミシェル・ブダも、国民投票の実施がジェローム派のプログラムにおいて中心を占めなかった理由を、共和派が受け入れる見込みがなかったためと説明している。J-M. Bedat, *op.cit.*, p.70.
- (55) 1881年の下院選後にナポレオン公に送った書簡において、ラングレは、共和派が大勝を取めたことは、政体に関する問題では共和政の勝利が決定的であることを証明していると述べている。AN 400 AP 134, lettre de Lenglé au prince Napoléon, 26 août 1881. またジェローム派内の自由主義勢力を代表するエドガル・ラウ

## 帝政と共和政

- ル＝デュヴァルは、「共和政とは普通選挙による相次ぐ表明が合法のものとした一つの事実である。そのことに異を唱え、破壊しようと躍起になることは子供じみたことである」と述べている。Edgar Raoul-Duval, *Le Peuple français*, 6 octobre 1880.
- (56) « Discours de M. Maurice Richard », *L'Ordre*, 3 mars 1880; G. Cunéo d'Ornano, « L'appel au peuple », *Le Peuple français*, 22 novembre 1879. なお、クネオ・ドルナノはジャコバン派の中でも、ジョルジュ・ダントンやカミーユ・デムーランを評価している。Id., « Notre programme » *L'Appel au peuple*, 15 février 1883.
- (57) 急進派の中には、ボナパルティズムに対する懐疑から国民投票に反対するもの多くもいたが、例えば、急進共和派の中心人物の一人であるアルフレッド・ナケは、行政府が巨大な権力を握ることには反対したものの、国民投票の導入を憲法改正案に取り込んでいる。Christophe Portalez, *Alfred Naquet et ses amis politiques. Patronage, corruption et scandale en République (1870-1898)*, Rennes, Presses Universitaires de Rennes, 2018, pp.162-167.
- (58) 拙稿「ジュール・アミーグに見るフランス第三共和政初期のボナパルティズムの一側面」『西洋史論叢』第37号、2015年、31-45頁。
- (59) J-M. Bedat, *op.cit.*, pp.84-89.
- (60) ラングレは以下のように述べている。「コミテ結成の話をしているときには40人の加入希望者がいた。しかし、いざ実行しようとすると、15人しかいない」。APP, BA62, 29 septembre 1881.
- (61) 前掲拙稿「一八八〇年代前半のフランスにおけるボナパルト派の思想と運動 —ヴィクトル派の形成と展開—」。
- (62) *Le Figaro*, 16 janvier 1883.
- (63) フランス各地で、ナポレオン公の宣言文が、どこで何枚掲示され、どのような反応を引き起こしていたかは国立中央文書館所蔵の報告書が詳しい。AN F7 12430, le prince Napoléon et son manifeste de 1883.
- (64) *L'Appel au peuple*, 15 février 1883. ナポレオン公自身は、まだ機会を待つ方が良いとして、創刊には反対だった。そのため、この新聞はナポレオン公から補助金を得られず、資金難に喘ぎ1883年6月に休刊を余儀なくされた。このことに、クネオ・オルナノは不満を抱いていたようである。APP, BA907, 21 et 28 février, et 1er juin 1883. この日刊紙は約4ヶ月で刊行を停止し、1884年春に刊行ペースを隔週に減らして再出発することになる。
- (65) APP, BA92, 7 mars 1883. また15区のヴィクトル派のコミテでもナポレオン公を支持する動きが確認されている。APP, BA1655, 16 mai 1883
- (66) APP, BA62, 24 mai 1883.
- (67) APP, BA62, 9 décembre 1883.
- (68) B. Joly, *Nationalistes et conservateurs en France, 1885-1902*, Paris, Les Indes Savantes, Paris, 2008, p.222.
- (69) ジェローム派の集会や講演会については、警視庁文書館の報告書に詳しく記されている。APP, BA62, Comité Bonapartiste, 1874-1886; APP BA88-100, Rapport Quotidien du Préfet de Police, 1879-1889.
- (70) Laetitia de Witt, *Le prince Victor Napoléon*, Paris, Fayard, 2007, pp.157-171.
- (71) ラングレは、1880年時点では、穏健共和派が自分たちに歩み寄るだろうと推察し、教権主義者たちから離れ、より民主的に振る舞う必要があると述べている。APP, BA89, 4 avril 1880. ジョリーの研究はこの点を重視し、ボナパルト派左派の「悲劇」は、左右のどちらにも手を組みうる相手がいなかったことであると指摘している。B. Joly, *Nationalistes et conservateurs en France, op.cit.*, p.222.
- (72) APP, BA90, 18 août 1881. また、1879年12月の時点でナポレオン公は急進派との協力を彼の支持者たちに説いている。APP, BA88, 13 décembre 1879.
- (73) APP, BA1242, 25 avril 1884.
- (74) 紙幅の関係上、詳述はできないが、例えばラングレは1889年の下院総選挙及び1890年のパリ市議会選挙において、急進派ブーランジストの団体である国民共和主義委員会 comité républicain national から出馬している。

- しかし、この団体の選挙集会においてラングレはボナパルティストという出自を批判され、自身の共和政に対する忠誠の表明を余儀なくされている。APP, BA1152, 25 avril 1890.
- (75) B. Ménager, *op.cit.*, pp.320-321; J-M. Bedat, *op.cit.*, p.70-73.
- (76) AN 400 AP 134, Lettre de Lenglé au prince Napoléon, 23 août 1881.
- (77) レオンス・デュポンは、保守的ボナパルティストの力を借りずに、ジェローム派単独で当選を果たすのは難しいだろうと述べている。APP, BA1059, 18 juillet 1880.
- (78) APP, BA907, 18 novembre 1884. 彼は、1870年代にボナパルト派が展開した王党派とボナパルト派の同盟政策を批判した一方で、1880年のある記事で、「1789年の遺産」を保護できるのはボナパルティストのみであるとして、「私たちが真の保守派」であると述べている。そして、保守派同盟がより支持を集めたいならば、人民からその力を汲み出すというナポレオンの政治を取り入れなくてはならないと主張している。このようにクネオ・ドルナノの「保守派」への路線変更は単純な転向と言い切れない要素も含んでいる。G. Cunéo d'Ornano, *Paris-Capitale*, 8 février 1880.
- (79) E. Pascal, « Une réponse », *Le Peuple*, 19 novembre 1884; Id., « Nouveau Programme de M. Cunéo d'Ornano », *Le Peuple*, 28 janvier 1885.
- (80) クネオ・ドルナノの伝記を著したベルテは、王党派の協力がなければ彼の再選は不可能だったと指摘している。Jean-Louis Berthet, *Gustave Cunéo d'Ornano. Le dernier bonapartiste charentais*, Sainte, Le Croît vif, 2013, p.198
- (81) G. Cunéo d'Ornano, « Les alliances », *L'Appel au peuple*, 24 mai 1885.
- (82) G. Cunéo d'Ornano, « Notre politique », *L'Appel au peuple*, 11 octobre 1885.
- (83) 1885年初頭、クネオ・ドルナノはナポレオン公に当てた書簡において「普通選挙をめぐる現在の状況では、皇帝の継承者は、共和派の列ではなく、保守派を率いる地位にあるのだと私は考えています」と綴っている。AN 400 AP 122, Lettre de Cunéo d'Ornano au prince Napoléon, 8 janvier 1885.
- (84) *La Souveraineté*, 25 octobre 1886.
- (85) APP, BA907, 23 janvier 1887.
- (86) 死による運動からの離脱も多かった点を記してきたい。ジェローム派日刊紙『コンバ』の主幹シャルル・ド・マッサス Charles de Massas は1883年9月初頭に死去し、1884年には、下院議員アントジャンとジャーナリストのレオンス・デュポンが亡くなった。ジェローム派内の自由主義的傾向を代表するラウル＝ドゥヴァルは、共和政を受け入れた保守派勢力の団体、共和派右派 Droite républicaine の創設を目指した後、1887年初めに死去した。1888年3月にはパスカルが自殺し、同年11月にモーリス・リシャルも病死した。活動家たちの死による離脱も、同派閥の衰退の流れを加速させたと考えられる。
- (87) M. Battesti, *op.cit.*, pp.536-541.
- (88) ナポレオン公は結局、ヴィクトル派を批判しながらも、彼らを否認 désavouer し、ボナパルティストから切り離すことなかった。その理由は判然としませんが、例えば、ナポレオン公は「形成されること心待ちにし、私とその推進者でありたい、仲裁役を担う党派 le parti modérateur は、私の考えでは、見かけは最も異なっているような考えを持つ人々の参加と協力を、彼らが人民主権の原理に賛同する限りは、受け入れなければならないのだ」と述べている。APP, BA1199, 13 mai 1880.
- (89) B. Joly, *Paul Déroulède. L'inventeur du nationalisme*, Paris, Perrin, 1998, p.206.